

高鍋町の 先賢と文化財

特集『三好退蔵』

Meendo

Vol.1



ロシア皇太子が斬りつけられた歴史的イベント「大津事件」。その渦中、検事総長として毅然と事件に対処したのが、高鍋出身の三好退蔵です。郷土が誇るその功績と人物像を、令和8年2月7日(土)の歴史シンポジウムに合わせて、全4回にわたりお届けします。

生い立ち

三好退蔵は、弘化二年(一八四五)五月十二日、高鍋村筏の田村極人質勝の三男に生まれました。母は綾部氏。長兄は早く亡くなり、六歳年上の次兄は義勝といいました。義勝と退蔵の兄弟はそろって高鍋藩校明倫堂に学び、二人とも俊才をうたわれました。兄・義勝は明倫堂教授城勇雄の教えを受け、弟の退蔵は日高耳水の教えを受けました。義勝は田村家を継ぎ、退蔵は五歳で宮田の三好鞠負の養子になりました。のちに鞠負の長女・すよ子(嘉永三年生)と結婚します。三好家は、もと広島の三好郷(現三次市)の出身で三代藩主・秋月種信に召し抱えられた門田治部左衛門が初代です。途中から出身地の三好を名乗るようになりました。家老の家柄で、上杉鷹山が米沢藩上杉家の養子に決まった時に「訓言」(奉贖書)を呈した名家老・三好善太夫を生んだ名家でした。

明倫堂に学ぶ

退蔵は嘉永五年(一八五二)藩校明倫堂に七歳で入学したと推定されます。六、七年間を小学課程である行習齋で学びます。行習齋ではまず「明倫堂学規十八則」を身につけなければなりません。「明倫堂学規」は、人として守るべき基本的なまじまりを十八の規則にまとめたものです。十八則を身につけることで生きる基本を体得できます。学習科目としては、学習順序にあけると、孝経、小学内篇・外篇、大学、論語など十三科目があります。これらを先生について声を出して読む、いわゆる「素読」を学びます。素読は先生の読むとおりに音読するだけなので、子供でもできます。幼いうちは文章の意味は理解できません

んが、成長するにしたがつて意味がわかるようになり、生きる軌範になります。素読のねらいはそこにあります。先生の講義(講釈)もありました。科目は孝経、小学内篇と同外篇です。そのほかに礼式、書道、数学があります。学校は九時にはじまり午後三時に終わります。先生の家に行って午前六時から「朝読み」(素読)をします。登校は午前九時、退校は午後三時です。

学習の成果をみる試験は三種類(三事試という)について行われます。句読(素読)試験(素読がちゃんとできるか)、筆道試験(必要な漢字や名称を筆記できるか)、背誦試験(暗記の程度、および和漢の名数要用なるものの知識)に合格する必要があります。次に「漢文だけの四書の内容」を読む試験があります。これらに合格すると大試験があります。「四書・五経の漢文を誤りなく読む能力」が試されます。成績優秀者には五等級がつけられ、最優秀者には白銀五枚の賞金が与えられました。三好退蔵は最優秀者として白銀五枚が与えられました。行習齋を卒業すると大学課程である著察齋で学びます。著察齋では自分で勉強し、疑問のところだけを先生に教えてもらうという教育です。明倫堂教育の特色のひとつは、「存寄(ぞんじより)」「意見具申」ができる能力を身につけることにあります。行政の第一線に立ったとき、問題点を迅速・適確に把握して、上層部に意見具申し、藩政改革を行うのが狙いです。

退蔵は四書・五経および近思録の学習から、人間に必要な朱子学の基本である「仁」を身につけ、「存寄」の能力を身につけました。退蔵は著察齋を十六歳頃卒業したと見られます。

風雲急を告げる時代背景

退蔵が明倫堂で学んでいるころ、嘉永六年（一八五三）六月に浦賀に米国艦隊四隻が提督ペリーに率いられて来航しました。これから幕末と呼ばれる混乱した時代に入ります。提督ペリーは翌年にも来航し、徳川幕府に日米和親条約の締結を求めます。幕府は朝廷に条約締結の許可を求めますが、朝廷は攘夷を主張し条約締結に反対します。幕府は独断で条約を締結しますが、朝廷との関係は悪化し、幕末の混乱は激化して行きます。

高鍋藩も幕末の混乱に巻き込まれて行きます。藩は幕府から海岸防衛のための海防策について諮問をうけます。高鍋藩の藩主は十代・秋月種殷です。種殷の異母弟に秋月種樹がいて、種樹は幕府から有能な人物として重要視されていました。種樹は兄・種殷の後継者の地位にいました。高鍋藩は外国船が来航したときの対抗策として、海岸防衛策を検討し、海岸防御取調都合を任命しました。退蔵の実父・田村極人がその任につきました。困難な財政状況のなかにもかかわらず、高鍋藩は大砲二門を鑄造して、外国船に備えました。そんな時代の中で退蔵は成長して行きます。

安井息軒の三計塾に学ぶ

元治元年（一八六四）二十歳になった退蔵は江戸に遊学し、兄の義勝とともに安井息軒の三計塾に学びます。

安井息軒は、寛政十一年（一七九九）に飢肥藩清武村に生まれ、儒学者の父・安井滄州に儒学を学びました。二十一歳のとき大坂に出て篠崎小竹に入門し苦学。二十五歳で江戸に出て古賀洞庵に入門したのち二十七歳で松崎謙堂に入門。三十二歳で郷里に帰り、飢肥藩の藩校・振徳堂が再興されたのを機に父・滄洲が教授に、

息軒が助教に就任。三十九歳のとき藩職を辞し、妻子を伴って江戸に移住。翌天保十年（一八三九）四十歳になった息軒は私塾・三計塾を開きました。

息軒の三計塾は、古義学派（または古文辞学派）といわれる学派に属し、同じ儒学であつても朱子学派の藩校明倫堂とは学風が異なるものでした。朱子学では四書・五経を学び道徳を身につけ、聖人に近づくことを目指します。古義学派では、「先王の道」が書かれた六経（易経、書経、詩経、礼記、楽経、春秋）を学びます。「先王」とは「古代中国に実在した聖人」のことで、堯、舜、禹、湯、文、武、周公、及び孔子を指します。六経には先王が行った正しい政治や文化や言行が示されており、これを学ぶことにより、現実在即した社会の運営ができるという考えがあります。

三計塾は各藩の俊才たちが集う塾として有名になります。息軒の社会的評価は次第に高まり、三計塾は全国の逸材を門下に集め、国家有用の人材育成の場として幕府も注目します。息軒は門人の個性にあつた教育を施します。文久二年（一八六二）、息軒は六十二歳にして將軍家茂から幕府儒官として、塩谷岩陰、芳野金陵とともに昌平坂学問所教授を拜命します。朱子学派以外の幕府儒官の任命は前代未聞でした。しかし、息軒にとって幕府儒官の地位は目的とする到達点ではありませんでした。このころから息軒は代表作に含まれる「論語集説」（論語について息軒独自の解釈書）などを著わします。元治元年（一八六四）息軒は幕府老中板倉周防守から見識を見込まれて、奥州白川堀代官に推挽されましたが、高齡を理由に固辞しました。前年には幕府に建白書を提出し、「軍備が整わぬうちは攘夷を決定すべきでないことを主張し、安易な攘夷論に警告を発するなど、批判を恐れることなく持論を展開しました。息軒独自の経世論は多くの人材を引き付けます。

三計塾では人格を磨きながら、社会に有用な人材を育成することに力を注ぎました。塾には各藩から選抜された英才が集い、切磋琢磨しました。同窓の塾生に、陸奥宗光（のちの外務大臣）、谷干城（西郷軍から熊本城を守った軍人）、品川弥次郎（のちの内務大臣）、小倉処平（飢肥藩出身の開明的指導者）、明石元次郎（日露戦争勝利の立役者の一人）、雲井龍雄（米沢藩志士）などがいました。高鍋藩の秋月種樹は息軒に尊敬を払いながら親しく交際しました。

三好退蔵が入塾したのは慶応二年（一八六六）で息軒六十七歳の時でした。退蔵が入塾した同年に、兄の田村義勝、鈴木来助、水筑弦太郎も入塾しました。息軒は学問を社会に役立てるための具体的施策の提唱者でもあり、社会的行動を進んで行いました。三好退蔵は安井息軒の学問と行動力に強い影響を受けました。

退蔵が三計塾に入塾したときの逸話がのこされています。当時三計塾は非常に繁盛しており入塾者が多く、退蔵が息軒に挨拶に行くとき塾は満員で空室がなく、息軒先生は、「折角であるがご覧の通りの満員であるから、どこかの塾において下さい」と断りました。しかし退蔵は「いかなる隅でもいいから是非置いていただきたい」というので論議しても帰ろうとしません。息軒先生は困って、「しからは雪隠だけは空いている。もし雪隠でもよければおいで下さい」といいました。退蔵は大変喜び、すぐさま畳を持参して雪隠に合わせて敷き、机と本箱を持ち込んで平然と読書していました。これには息軒先生も脱帽して置いてくれることになりました。

退蔵、兵制改革のため独断で薩摩から指導者を招く

高鍋藩の兵学は、伝統的に越後流軍学と長沼流軍学が用いられてきました。兵学を近代化し、西洋流に転ずる必要があるとの横尾栗・坂田芳

らの建議により兵備を改変し五隊八屯に編成しました。しかし藩校生徒は新しい兵制を理解せず、従来の身分制度に固執し、まじめに教練を行うとうともしませんでした。高鍋藩の兵制改革は時代に遅れます。

慶応四年（一八六八）二月、退蔵は堤長発とともに藩命によって薩摩藩に使者として赴くことになりました。ふたりは薩摩藩の練兵を見て兵制が近代化されているのに驚きました。高鍋藩の旧例墨守は近代戦に全く役に立たず、改革に急を要することを痛感しました。そこで退蔵は独断で、藩命と称して練兵の指導者の招聘を薩摩藩重臣に要請しました。薩摩藩は承諾し、英式操練指導者・徳田彦二を派遣してくれることになりました。退蔵は同行した堤とともに徳田を同道して帰藩します。

高鍋藩邸に着くと、「独断で操練指導者を招聘した」ことを報告し、「独断専行の罪は自分にあります。処罰は甘んじて受ける」ことを言明します。高鍋藩は、退蔵の独断行動はその憂国の至情にあることを理解し、退蔵を咎めませんでした。奉行・泥谷敦水が徳田に英式操練を正式に依頼します。藩主・秋月種殷も徳田を謁見しました。このあと高鍋藩の人心は一新され、英式操練は軌道にのり、兵制の近代化が実現しました。高鍋藩が戊辰戦争に出兵し戦功を立てることができたのは、このときの三好退蔵の英断によるものだといわれています。

宮崎市安井息軒記念館提供



安井息軒